

Focal glomerular sclerosisに関する検討

新潟大学 第2内科 木下 康民 大沢 源吾
土屋 俊晶

I. 緒 言

ステロイドホルモン剤（以下ス剤）によって治療が容易になったと思われる minimal change 型のネフローゼ症候群（以下ネ症）のなかにあつて、薬剤に抵抗するものが知られるに至り、この中に組織像として糸球体の focal sclerosing lesion が注目されている。ネ症における focal glomerular sclerosis (FGS) の病態の解明を企て、臨床例の分析を試みた。

II. 対象と方法

新潟大学第2内科に入院したネ症患者のなかから、光顕組織像で minimal change ないし極く軽度の増殖性糸球体変化を示したものの42例、59生検組織を検討した。末梢四リンパ球の subpopulation は橋らの microplate 法を用い、spontan rosette forming cell を T-cell, EAC-rosette forming cell を B-cell とし、同時にペルオキシンダーゼ染色標本を作り、陽性細胞を除いて補正したり。

III. 結果および考察

42例中、segmental glomerular sclerosis を示したものは11例で、そのうち6例は global sclerosis (or obsolescence) を伴っている。global sclerosis のみのものは6例ある。ス剤に対する反応は表1の如くで、無初の6例はいづれも“segmental” sclerosis を含んでいる。これに対し、“global” sclerosis のみの例には無効がない。従つて“global” sclerosis は必ずしも“segmental” sclerosis の進行したもののみではないと思われる。このことは全糸球体数における global sclerosing lesion を示す糸球体数からも示唆され、sclerotic glomerular lesion の数が必ずしも global 型で増加してはいない。むしろ“global” のみの6例では発症から経過の長いものが多いことや、症例によっては高血圧の合併があること等が重視されるべきかも知れない。この様に“global” の場合には、segmental から移行したものの他に他の機

表1 FGS とス剤効果

組	織	完解	不完	無効	計
	Scl. (-)	24	1	0	25
Scl. (+)	{ Seg.	1	2	2	5
	{ Seg+Glob.	2	0	4	6
	{ Glob.	5	1	0	6
計		32	4	6	42

序に基づくものが含まれている可能性があり、ス剤効果の推定に際しては sclerosis 病変の性格や全糸球体数における病変糸球体の分布の割り合いなども検討する必要があると思われる。

年令的には(表2)、14才以上の症例数が僅か3例と少ないので、小児期との比較検討は14才以下の症例数が僅か例と少ないので、小児期との比較検討は児科領域での報告をまつ必要があるが、今回の42例の検討のみでは15~19才の男子例には FGS がみられず、一方、20~29才台に男子8例中5例にみられた点が注目を惹く。Nash らは小児の約10%に FGS を認めると述べているが、私共の15才以上の39例では segmental が10例、25.6%、global も加えると16例、41%に達し、大学病院という特殊性もあるかも知れないが、小児に比し FGS が成人に多い可能性を示唆している。

FGS の sclerotic lesion の成立機序として、免疫機序の関与を推定する考えのほかに、局所的な血流動態の異常、メサングウム細胞の機能障害、あるいは上皮細胞の関与した基底膜代謝異常を重要視する考え、等が推定ないし発表されているが、自験例の検討からはこれらの病変が primary なものか、あるいは secondary なものかを決し難く、またその発生機序も決して一様なものではなさそうに思われる。この点に関してはネ症を示さなかった FGS の1例で、やはり上皮側の基底膜異常を呈したものがあり、ネ症の成田と focal sclerotic lesion の成立機序を単純に結びつけて同一の因子に求めることが必ずしも正しくないかも知れない、ということを示唆

表 2 FGS の年齢分布

年 令	性	None.	Seg.	Seg. Glob.	Glob.	計
<14	m	1				1
	f	1		1*		2
15~19	m	8				8
	f	2	1	1	1	5
20~29	m	3	2*	1*	2	8
	f	3	1	1*	1	6
30<	m	4	1*			5
	f	3		2*	2	7
		25	5	6	6	42

する。

次に FGS を伴うネ症の本態に関しては臨床検査成績からこれを示唆する様な特異所見はないが、FGS を示しス剤無効であった1例が未治療時(発症初期)に末梢血リンパ球の T, B 細胞の変動を全く示さなかった点で、FGS を伴わずにス剤によく反応した他の2例が発症早期の未治療時や再燃時にいづれも T 細胞の減少、population の低下を示したことと対照的に思われた。すなわち、一般に minimal change 型のネ症がリンパ球、殊に T 細胞の機能異常に基づくとする仮説がもし成り立つとすれば、治療に抵抗する FGS のなかにはこの症例の様にリンパ球異常を呈さない、従ってその成因が異ったものが混在している可能性がある。

IV. 結 語

ネ症患者のうち組織学的に minimal change ないし極く軽度の増殖性糸球体変化を示したものの42例、59生検組織を検討し、focal segmental glomerular sclerosis を示すものは15才以上の39例中10例、25.6%であり、global sclerosis を加えると39例中の16例、41%に達した。本邦での小児科例の出現率に比較しても、成人に FGS の出現が高い様に思われた。

次に、FGS の形態について特に電顕的検討を加え、完全な sclerosis のみられない係蹄の基底膜の上皮側における限局性変化に注目した。

最後に、少数例ではあるが、末梢血リンパ球の subpopulation について検討し、FGS を示しス剤が無効であった1例にはリンパ球 subpopulation の変動がみられなかった点で、ス剤に反応した mininimal change 群の症例とはリンパ球動態の面で異った点のあることを認め、その特異性を推測した。

文 献

- 1) 平安山英機, 土屋俊晶, 木下字民: 腎疾患におけるリンパ球 subpopulation, 第18回日腎総会, 1975, 大阪。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

.緒言

ステロイドホルモン剤(以下ス剤)によって治療が容易になったと思われる minimal change 型のネフローゼ症候群(以下ネ症)のなかにあつて、薬剤に抵抗するものが知られるに至り、この中に組織像として糸球体の focal sclerosing lesion が注目されている。ネ症における focal glomerular sclerosis(FGS)の病態の解明を企て、臨床例の分析を試みた。